「麒麟（きりん）がくる」特別企画

山県歴史浪漫探訪

明智光秀を主人公とする大河ドラマ「麒麟がくる」の放映が決まりました。山県市には、明智氏の本流・土岐氏の最後の本拠となった大桑地区などや、光秀の出生や晩年にまつわるさまざまな伝承を残す美山地域中洞地区などがあります。大河ドラマを機会に、市内の浪漫溢（あふ）れる歴史を紹介します。

問生涯学習課　TEL 22-6845

1　山県に残る偉人の足跡と伝承

土岐氏と山県

土岐氏は美濃を地盤とした武士の一族で、室町時代には美濃、尾張、伊勢3国の守護を務める大大名でした。

大きな権力を誇った土岐氏が戦国時代に拠点としたのが大桑地区です。

1535年の長良川大洪水を機に美濃国の守護所が置かれた大桑地区は、当時栄華を誇っていた越前朝倉氏の拠点・一乗谷（福井県）にならい、城下町が整備されました。

大桑地区は、斎藤道三によって大桑城が陥落し土岐氏が没落するまで、土岐氏の最後の拠点となりました。

現在も、要害堅固な山城である大桑城跡をはじめ、土岐氏の菩提（ぼだい）寺である南泉寺や氏神を祀（まつ）る十五社神社、さらに城下町の内と外を分ける「惣構え」の役割を持った四国堀など、当時の面影を残す史跡などが多く残っています。

【大桑城跡の絵図】

近世に描かれた大桑城の絵図で、天守台や台所、馬場、岩門、切井戸、城へ至る道など、城郭の縄張りを示す貴重な資料です。
また、下部には城下町の内外を隔てた四国堀や越前堀のほか、六万墓などが描かれており、当時の大桑地区の状況をよく伝えています。

【大桑城跡（古城山山頂）から南方を望む】

大桑城跡からは、城下町が広がっていた大桑地区や、土岐氏が対峙（たいじ）した斎藤道三の拠点である岐阜城（稲葉山城）、濃尾平野から伊勢湾までを一望することができます。

大桑城は、美濃国守護の拠点にふさわしい、美濃から尾張までを見渡せる位置に築かれました。

大桑城跡へは、はじかみ林道の大桑側入り口付近および、はじかみ林道頂上付近の2カ所から、登山道を通って行くことができます。

明智光秀と山県

土岐氏には多くの支流（分家）があり、明智光秀も土岐氏支流の一人です。

光秀の出生については不明な点が多く、はっきりとは分かっていません。

山県市では、中洞地区に光秀の出生や晩年の伝承が多く残されています。

この伝承によれば、土岐基頼と中洞の豪族・中洞源左衛門の娘との間にできた子が光秀で、娘が身ごもったときに「3日でも天下を取る男子を」と祈ったとされる行徳岩や、産湯をくんだとされる井戸があります。

また、光秀は山崎の合戦の後故郷の中洞に落ち延びており、関が原の合戦に参戦する途中藪川で溺死するまで生きていたと伝えられています。

地元の白山神社には光秀の墓と伝わる「桔梗塚」があり、毎年2回供養祭が行われています。

山県市歴史ストーリーガイド

今、ときが動き出す

A5版/16p

生涯学習課などで
配布しています。

「山県」という地名は、今から1300年前に作られた現存する日本最古の戸籍「御野国山方郡三井田里戸籍」にも名前が記されるほど古い歴史を持ちます。

「今、ときが動き出す」は、山県市の長い歴史を、「古代」「中世」「中世・近世」に分けてそれぞれの魅力を紹介する、歴史ストーリーガイドです。

今回紹介する土岐氏や明智光秀についても詳しく掲載していますので、ぜひご覧ください。

2

山県に残る光秀伝説

市内には美山地域中洞地区を中心に、明智光秀の出生や晩年に関する伝承が数多く残っています。これは光秀が、美濃国を治め山県市にも縁の深い、土岐氏支流の出身であることと関係があるのかもしれません。
本人や親族の墓があるだけでなく、毎年2回供養祭が行われるなど、地域の人によって今も光秀の伝承が残されています。

明智光秀出生の伝承

産湯の井戸と行徳岩

中洞地区は明智光秀が生まれた地だと言い伝えられています。
誕生地とされる白山神社には、光秀の母が産湯の水をくんだという井戸が残されています。
また、付近の武儀川には、光秀を身ごもった母が、「たとえ三日でも天下を取る男子を」と祈ったという行徳岩があります。

明智光秀の義弟の墓

明智孫十郎直経の墓

明智孫十郎直経は、恩田氏の出身で、明智光秀の義弟と伝わる武将です。本能寺の変の際、織田信長の嫡男・織田信忠を攻め、討ち死にしたと言われています。
孫十郎直経の墓は富永地区の神明神社付近にあり、父母と本人、妻の戒名が刻まれています。

明智光秀の墓

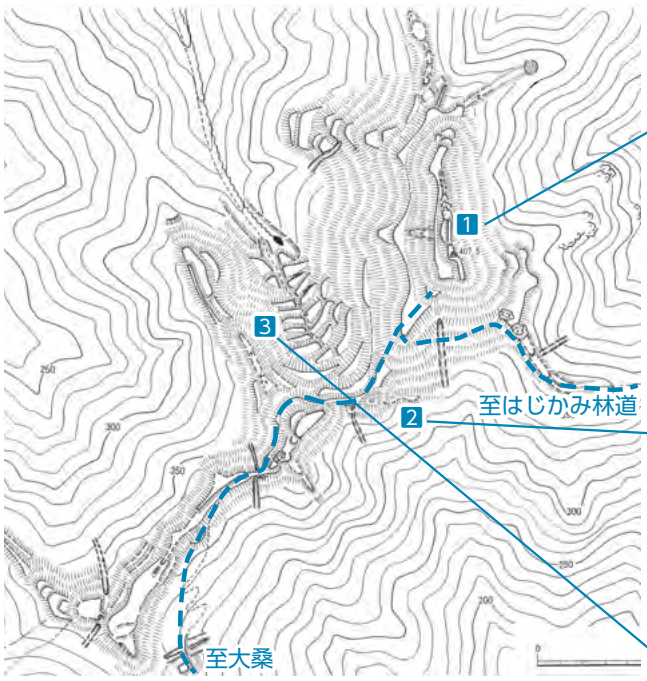
桔梗塚

桔梗塚は明智光秀の墓と言われ、塚の名称は明智家の家紋が桔梗であることに由来しています。塚は、光秀出生の地と伝わる白山神社に隣接する林の中にあります。
桔梗塚のある中洞地区には、「山崎の合戦で死んだのは影武者で、光秀本人は生き延びて郷里中洞に落ち延び、身代わりとなった影武者・荒木行信の忠誠に深く感銘して「荒」と「深」を取り、荒深小五郎の名で暮らしていた」という伝承があり、現在も供養祭が行われています。

3

名門美濃土岐氏最後の本拠

美濃国守護の土岐氏が最後の拠点としたのが、大桑地区です。大桑に移った土岐氏は、越前朝倉氏の居城一乗谷にならい、大桑城の城構えや城下町を本格的に整えました。その後斎藤道三との激戦の末落城した大桑城ですが、大桑地区には現在でも城郭の遺構のほか、麓にも土岐氏とかかわりの深い寺社などがあります。



「岐阜県中世城館跡総合調査報告書第二集」岐阜県教育委員会2003　中井均作図

大桑城の遺構

1主郭部　古城山山頂にある大桑城の主要部分です。

2切井戸　現在も水をたたえる井戸。落城の際、土岐頼芸が家宝である金の鶏をこの井戸に隠したといわれています。

3曲輪（くるわ）群　北西の谷には斜面を平らにした「曲輪」が連なっており、陶磁器などが出土していることから屋敷が並んでいたと考えられています。

※その他にも、「石垣」「堀切」「竪堀」などの遺構が残されています。

土岐氏の氏神を祀る

十五社神社

平安時代に創建された神社で、土岐氏が氏神として崇敬しました。1540年に土岐氏が奉納した狛犬（こまいぬ）一対が現存しており、狛犬の基底部には「天文九庚子年」「奉土岐氏神」と刻まれています。

道三との激戦を伝える

六万墓

斎藤道三との戦いで戦死した人を弔う六万墓の石碑は、四国堀の側に立っています。戦いの後に南泉寺住職の仁岫宗寿（じんしゅうそうじゅ）が焼香を行ったとされており、激しい合戦がこの地で行われたことを物語っています。

大桑城下防衛の要

四国堀

大桑城下に入る谷筋をふさぎ止めるように、幅約8m、長さ約100mに渡って残る空堀と土塁です。名前は、尾張、伊勢、越前、近江の4国の加勢を受けて築いたことに由来しています。越前朝倉氏の拠点、一乗谷城下の「上・下城戸」と同じ機能を持つことから、その影響がうかがえます。

土岐氏代々の菩提寺

南泉寺

南泉寺は、1517年に当時の守護・土岐政房が土岐氏の菩提寺として開山しました。
1551年には、「心頭滅却せば火も自ずと涼し」で有名な土岐氏出身の快川紹喜（かいせんしょうき）が住職となり栄えました。文芸に優れた土岐頼芸の作と伝わる鷹の絵のほか、仁岫宗寿語録などが多数所蔵されています。